

ほほえみ

庶民的な暖かさを感じさせてくれる話芸と演技で親しまれたミヤコ蝶々さんが先月亡くなった。人を笑わせる仕事ながらも私生活では恵まれず、2度の離婚も含め暖かい家庭には無縁で孤独な人生だった。そんな蝶々さんが好んで色紙に書いたセリフは「どんなに悲しい涙でもいつかは乾く時がある」また周りのスタッフにはよく「お前、下を見てどうすんねん。上見て生かなくどうすんねん」と、言っていたという。常に前向きな気丈さが偉大な漫才師、女優、そして我らの「お母さん」を作っていた。

<第65回 ほほえみの会>

県立短大の金城先生も参加され寺島先生を含め10人が集まりました。

6年生の女の子、8回に渡る治療を終えて今月末に退院を迎える。が、白血球の上がりが悪いし、何よりも再発が心配。本当に退院をしていいのだろうか。という悩みがでました。

これに対して

8回の治療をしていれば白血球の上がりが遅いのは当然。再発を心配しても仕方ない。それよりも8回の治療で効果があったので退院を迎えられたことを喜ばしいのでは。

といった意見が出ました。

また他にも、自分も退院後に心配で心配で、病院での診察の度に先生に再三大丈夫かと聞いた。

すると先生は「そんなに心配しないで、なるようになるさ...」と思って下さい。

と言われた。その言葉で随分気分が楽になった。

悪くなることを今から思い悩んでも何にもならないということに気付いた。という体験談も出ました。

さらに、地元の学校に戻ったときにうまくやっていけるか心配。
という話も。

退院しても普通の生活ができるまでには体力的にも、また髪の毛が生えてくるにも時間はかかる。焦らずにゆっくりと見守った方がいいだろう。と言う声がありました。

また、来年は中学校にも上がるということで学校のことも話題になりました。

出席者の中には病気をしたことで体型、体力的に見て公立ではなく私立の小学校、中学校に通わせる人もいました。

やはり私立の方が特別の配慮（低い身長に合わせ机と椅子を特別に用意）をしてくれるし、教室での人数も少なく面倒をよく見てくれるようです。

学校では障害を持った子がいると低学年ではみんなで面倒を見るが高学年になって自分がやりたいことが出てくると面倒を見なくなる。行事でもその子がいるからクラスで優勝ができないと言われる。最近では学校もバリアフリーになっているが、先生や子どもたちに意識がないと本当のバリアフリーにはならない。

でもそんな中でも、周りに甘えるばかりではいけない。

例えば体操の着替えで遅くなる。階段を下るのに時間がかかる。

そんな時に 友達が手を貸してくれても「ありがとう、先に行つて」と言えるように、自分自身が強い心を持てるようにしていかなければいけない。といった話が出ました。

血液腫瘍科では小児がんと診断されて入院治療を受ける子どもと家族のために、病気を理解し、納得して治療が受けられるようにと小冊子を作ることになりました。最初に急性リンパ性白血病の方にアンケートをして、貴重な意見が多く集まっているということです。期待したいと思います。

次回は12月10日（日）時からです

ほほえみの会 代表 池田恵一